印度學佛教學研究第四十二巻第二号　平成六年三月

近代日蓮宗の海外留学についての一考察

安中尚史

一

明治維新期の仏教徒による海外渡航といえば、政府の海外使節団に同行した浄土真宗西本願寺派の視察団が著名であり、また視察地から島地黙雷が「三条教則」による国民教化に反対して建白書を提出したことは周知の通りである。

明治維新政府は、新国家を形成するための集権体制確立には、天皇制による統一と共に、近代化という西欧化を推進することが必要であると考え、欧米先進諸国の諸制度・文物の調査と、幕末に締結された不平等条約の改正を目的とした西欧諸国への大規模な使節団、いわゆる岩倉使節団を組織し、明治四年十一月から一年十ヵ月をついやし十二ヵ国を歴訪した。そしてこの使節団に政府の官僚とともに海外の宗教事情の視察団が組織され、同時にイギリス、ドイツに留学生を派遣した。

これに対し日蓮宗僧侶の海外への留学は、明治十九年に日蓮宗初代管長で、日蓮宗の近代化の担い手となった新居日薩の弟子で、上海に留学し英語を学び、後にアメリカへ渡った松木文恭という人物がはじめであった。(1)

このころ、新居日薩は教導職制度の廃止にともない、宗門内の教育改革を行い、日蓮宗大教院に英語、数学、物理などといった普通学科を含むカリキュラムを設け、教育の充実をはかった。また自分の弟子を日蓮宗の教育機関だけではなく、福沢諭吉の慶応義塾にも学ばせていた。そしてこのような時代の流れに即応した教育の重要性を認識した新居日薩は、西洋の学問ならびに語学を自分の弟子に身につけさそうという目的で、松木文恭を海外へ留学させたと考えられる。

しかし日蓮宗からの正式な海外留学生としては、明治三十四年にアメリカ、コネチカット州のエール大学へ留学をはたした柴田一能を待たねばならない。

この柴田一能という人物は明治六年、丹後の国、宮津で生まれ幼くして宮津経王寺の堀日温に弟子入りし、後に八王子

本立寺及川真能に仕えた。そして福沢諭吉に師事し慶応義塾に学び、在学中に東京の仏教青年会の一員として、また三田仏教会では幹事をつとめた。卒業後は山口高等学校の教授として招かれようとしていたが、エール大学に留学し帰国後は日蓮宗大学林設立委員会の秘書役として活躍し、文部省への申請書類を慶応義塾の協力を得てその中心となって作成した。設立後は日蓮宗大学林中等科教頭に就任し、その後慶応義塾大学教授、日蓮宗宗会議員、日蓮宗宗務総監の要職を歴任し、また汎太平洋仏教青年会会長としてハワイ、カリフォルニアに赴き海外布教に尽力した。この間、昭和十二年新宿成子常円寺に晋山し、昭和二十六年遷化した。

二

柴田が海外へ留学するきっかけとなった要因のひとつに、慶応義塾に就学していたことが考えられる。慶応義塾といえば当時の私立学校の中でも特別な存在であり明治維新期に政府に大きな影響を与えた福沢諭吉が幕末に蘭学塾として設立した教育機関である。その後、他の私立学校に先駆けて大学部を設置し大学の名称を使用し、また明治三十二年、私立学校としてはじめて海外へ学生を留学させていた。そして慶応義塾の留学生田中一貞と一緒に日本からアメリカに渡り、エール大学に留学したことからも、当時の柴田一能を取り巻く環境が留学を実現することが可能であったと考えられる。

また経済的な面から当時の海外留学をみると、けして容易なことではなかったようである。エール大学近くの当時の一週間部屋代が最低でも一ドル五十セント、食費が同じく一週間で三ドル五十セント、当時の一ドルは日本円でおよそ二円、生活するだけでも一週間で五ドル、およそ十円を必要としていた。(2) ちなみに明治三十二年の文部省留学生には一ヵ年一、八〇〇円以内という規定があり、(3) また柴田一能とともにエール大学に留学した田中一貞は十七ヵ月で一、五〇〇円を慶応義塾から支給され、このほかアメリカまでの往復の交通費が約九〇〇円ほど必要であった。(4)

柴田の海外留学は当初、日蓮宗の正式な留学生ではなく、慶応義塾を卒業した日蓮宗僧侶がアメリカへ留学するということが、当時の日蓮宗の機関誌的な役割を果たしていた『日宗新報』(七七〇号)に掲載されていた。しかしその後の『日宗新報』(七七三号)では、日蓮宗の正式な留学生として派遣が決まったことが記事の一部として書かれてる。また、同号に「告示」として「北米合衆国エール大学へ留学を命ず慶応義塾文学士准講師柴田一能」と記載されている。

柴田一能の日蓮宗からの海外留学が正式に決まってからは日蓮宗青年同志会や、日蓮宗大檀林雄志らによる送別会が開かれ、また「柴田一能師告別演説会」が開かれ、日蓮宗管長

から法華経と折五条が贈られた。[5] このことから日蓮宗の期待を担っての海外留学であったことがわかる。しかし、経済的な面での援助が果して日蓮宗からあったのかについては不明であるが、日蓮宗からの正式な留学生として派遣が告示されている以上、そのことは十分に考えられる。

三

柴田が日本を出発したのは明治三十四年五月二十八日のことであり、サンフランシスコに向かって横浜を船で発った。同行者は先にも述べたように、慶応義塾から正式な留学生として派遣された田中一貞と、曹洞宗からの留学生山崎快英であり、三人ともエール大学に留学をした。

柴田ら一行は六月十一日、ビクトリア港へ到着し、アメリカ大陸への上陸を果たした。その後、シアトルから鉄道で大陸を横断し、ニューヨークに十六日から二十二日まで滞在し、同日エール大学のあるコネチカット州ニューヘブンへ到着した。横浜を出港しておよそ一カ月後のことであった。そしてその足でエール大学におもむき、先に留学を果たしていた慶応義塾の普通科時代の同級生、松本宗吾の案内で入学手続きをし、アメリカでの生活の一歩を踏み出した。[6]

大学では、主任教授のラッド博士に師事し哲学・倫理学・宗教学の研究をすすめ、また研究のかたわら明治三十五年四月八日に、釈尊降誕会を慶応義塾からの留学生、田中一貞、前京都妙心寺学林教頭宝山良雄・曹洞宗の山崎快英などと共に行った。また同年四月二十五日には日蓮聖人立教開宗六百五十年を記念して、記念講演会を柴田一能が中心となって開催した。この講演会には残念ながら外国人の参加は見られなかったが、宗教関係以外の留学生の参加があった。この講演会で柴田一能は英語による「宗祖伝」を、また他宗派の宝山良雄は「宗教的生活とは何ぞや」、山崎快英は「開宗記念会に際して所信をのぶ」という題名でそれぞれ講演を行った。[7] ちなみに当時のエール大学の日本からの留学生は二十三名確認でき、その内訳は経済学科十一名、哲学科六名、法学科二名、森林学科一名、鉱山学科一名、英文学科一名、普通学科一名であった。

その後、柴田は明治三十五年六月にエール大学からマスター・オヴ・アーツの学位をうけ、そのことは『日宗新報』（八二〇・八二二号）でも取り上げられている。この学位論文は「カント学及び実在論管見」という題名で、六月二十日に学位を授与された。渡米後、わずか一年での学位授与であり、柴田の学力と努力が伺えられる。

また翌三十六年一月二十七日にはエール大学哲学会において日本人留学生による講演会が開催され、柴田一能「日宗教義の一班」、山崎快英「禅宗とは何ぞや」、宝山良雄「仏教汎

論」というようにそれぞれの宗派に関係する発表を行った。またキリスト教の立場から村田勤が「キリスト教の立場より真宗を論ず」といった講演もおこなわれた。そしてこの講演会には教員をはじめ学生や一般の聴衆もあつまり、かなりの規模で行われた。このような日本仏教関係の講演会はエール大学が開校されてから今までに開かれたことはなく、日本からの仏教研究者の活躍のほどがわかる。[8] その後、同年六月三十日にアメリカを出国し、ヨーロッパ各国を視察しながら、二ヵ月半後の九月十五日に神戸港に帰国し、足掛け三年にわたる海外留学は無事おわった。[9]

四

このように始めて日蓮宗の正式な海外留学生として派遣された柴田一能の留学の経過についてみてきたが、ここでいま一度、留学の経緯をみるならば当時の日蓮宗の教育に関する状況が大きく影響されていることがわかる。

当時、明治三十五年は日蓮が立教開宗をしてからちょうど六百五十年にあたり、それをきっかけとして日蓮宗内では様々な改革案が持ち出され、具体的には日蓮宗宗会の開催や、教育制度問題について議論がなされた。特に教育問題に関しては、日蓮宗青年同志会が改正教育案を発表し、第一回日蓮宗宗会に提出し、教育問題の重要性を宗門内へなげかけた。[10] その影響もあって、宗門内で教育に関する重要性の認識を自覚した結果、教育機関の統一、日蓮宗大学林の設立、といったことへ進展していった。そして日蓮宗の教育の充実をはかる一手段としての海外留学への派遣ではなかったかと考えられる。今後、柴田一能の帰国後の活動ならびに柴田一能につづく海外留学生を調査、検討をすすめ、当時の日蓮宗の教育問題について考察することによって、近代日蓮宗の動向を明確にする手がかりにしたい。

1 『日蓮宗教報』三五・一〇八号
2 『日宗新報』七九九号
3 明治三二年五月一七日勅令第二〇二号
4 『慶応義塾大学百年史』一一四二頁
5 『日宗新報』七七八号
6 『日宗新報』七八四・七八八・七八九号
7 『日宗新報』八一四・八一五号
8 『日宗新報』八四五号
9 『日宗新報』八五九号
10 『日宗新報』七七〇号

〈キーワード〉柴田一能、エール大学、海外留学

（立正大学大学院修了）